



ウェディングストーリー
大切な人に
会いたくなる
結婚式の物語

ウェディングプランナー
有賀明美

ウェディングストーリー
**大切な人に
会いたくなる
結婚式の物語**

ウェディングプランナー
有賀明美

ダイヤモンド社

[著者]

有賀明美 (ありが・あけみ)

テイクアンドギヴ・ニーズ ウェディングプランナー

1977年生まれ。フェリス女学院大学卒業後、テイクアンドギヴ・ニーズに入社。これまで数多くの芸能人やアーティスト、プロスポーツ選手などから指名を受け、その結婚式をプロデュースしてきた実績を持つウェディングプランナー。

型にはまった結婚式が一般的だったなか、「サプライズ」という新しい概念をつくりだした“オリジナルウェディング”の先駆者的存在。

ブライダルにおける大胆な発想力と、それを支えるエネルギーな行動力は各所で高く評価されており、多くのテレビ番組に出演するだけでなくドラマ「ウェディングプランナー」、「夫婦。」、「大切なことはすべてきみが教えてくれた」などでのウェディング監修を担当。

近年ではプロデュース力を活かして、T&Gオリジナルのウェディング商品を秋元康氏とのコラボレーションにより生み出すなど、幅広い分野へとその活躍の場を広げ各業界から注目を浴びている。著書に『なりたい自分になれる魔法の幸せ計画』がある。

テイクアンドギヴ・ニーズHP <http://www.tgn.co.jp/>

有賀明美オフィシャルブログ <http://ameblo.jp/a-ariga/>

ウェディングストーリー 大切な人に会いたくなる結婚式の物語

2012年1月13日 第1刷発行

著者——^{ありがあけみ}有賀明美

発行所——ダイヤモンド社

〒150-8409 東京都渋谷区神宮前 6-12-17

<http://www.diamond.co.jp/>

電話／03-5778-7236 (編集) 03-5778-7240 (販売)

装丁——中井辰也

イラスト——柴田ケイコ

製作進行——ダイヤモンド・グラフィック社

印刷・製本——ベクトル印刷

執筆協力——河合香織

編集担当——土江英明

© 2012 有賀明美

ISBN 978-4-478-01422-6

落丁・乱丁本はお手数ですが小社営業局宛にお送りください。送料小社負担にてお取替えいたします。但し、古書店で購入されたものについてはお取替えできません。

無断転載・複製を禁ず

Printed in Japan

ウェディングストーリー

大切な人に会いたくなる結婚式の物語

はじめに

大切な方との魔法の時間

結婚式は二人の門出を祝うセレモニー。

……というのは結婚式が持つ意味合いのほんの表面でしかないような気がします。

これまで12年間で1000組以上の結婚式を見てきた中で思うのは、結婚式は人と人の絆を修復する日でもあるということです。

人生が80年あるとしたら、その3分の1ぐらい生きてきた時期に結婚式を挙げられる方が多いと思います。

そんな新郎新婦とお話していると気づくのが、20年、30年生きていると、大切な家族や友人などとの絆が少し綻びてしまっていたり、その絆を本当は結び直したいんだけど、きつかけがないまま月日が経ってしまっているケースが少なくないということです。

私たちウェディングプランナーはそんな綻びに気づき、結婚式という日をきつかけに人と



人の絆を結び直す「絆の修復屋」でありたいと思っています。

そしてたった1日でしかないけれども、その日をきっかけにお二人の人生や家族の未来が変わっていく手助けをさせていただきたいと。

結婚式でどんな時間を過ごすかによって、残りの3分の2の人生で何を大切に生きていけばいいのかに気づくことができるのです。

たとえばこんなことがありました。

結婚式の日までお父さまと十数年口をきいておらず、同じテーブルで食事をするこゝろさえできなかったことを新婦はずっと謝りたいと思っていましたが結婚式で「ごめんね」という一言を伝えられたことで長年のわだかまりが解け、1年後には父と娘、そして新たに誕生した命と一緒に笑っているお写真が送られてきたのです。

私たち日本人はシャイだったり照れくさかったりして、大切な人にこそ言葉で想いを伝えることが苦手であるという傾向があります。伝えられないまま人生を終えてしまう人もいます。でしよう。

日常生活の中で常に「愛してる」「ありがとう」「ごめんね」が言えていれば、もしかしたら結婚式にはそんなに力を入れる必要がないのかもしれない。

大切な人の顔を見て、その人の顔を記憶して、手と手で温もりを感じたり、その人に言葉で何かを伝えられる日というのは、人生の中で思い返せば結婚式だけなのかもしれません。印象に残る光景がありました。

「とりあえず新郎新婦のお祝いに来た」

そんな様子だった30代男性のゲストが、結婚式を終えた後に携帯電話で話をしながら出口に向かわれていました。

「かあちゃん、久しぶり」と。

きっと結婚式に参加している中で、少しずつ心の温度が上がり、大切な人の声が聞きたくなったのでしょう。そんな結婚式を私たちは、「One Heart Wedding」と呼んでいます。

この本では私のプランナー人生の中で印象に残っているお話と、全国の仲間のプランナーたちが創った「One Heart Wedding」を集めました。

どんな家族にもそれぞれの物語があります。

「そうか、俺にも愛してくれるお袋がいるな」

「そう言えば長いこと声を聞いてなかったな」

本書を読み終えた後に、日常の忙しさに追われて思い返すことの少なくなっていたご両親だったり、奥さんだったり、旦那さんだったり、子どもだったり、友人だったり、そんな大切な人の声が聞きたくなる。

そんなきっかけになれることを願っています。

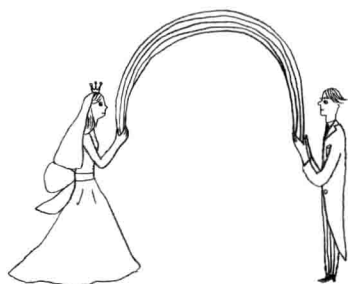
今まで通り過ぎてしまっていた小さな普通の幸せに気づくことができた、あるいは、こんなに愛されていることに気づくことができた。

見えなかったただでそこに確実にあつた愛情や絆が、その日之境に見えるようになる。

そんな魔法の時間が結婚式なのです。

2012年1月

有賀明美



ウェディングストーリーー 大切な人に会いたくなる結婚式の物語 ● 目次

はじめに 大切な人との魔法の時間 2

1 優しい記憶 9

2 奇跡の青空 21

3 母の夢 35

4 取り戻した絆 41

12	11	10	9	8	7	6	5
3月11日	30年目の結婚式	夢のバージンロード	幸せの香り	約束の歌	国境のない空	父の宝箱	言えなかった言葉
121	111	101	91	83	71	61	51



優しい記憶



「幸せになれよ」

こんな何でもない一言なのに、うまく伝えることができないお父さまも少なくありません。娘に伝えたいことがあるのにもかかわらず、恥ずかしくて言葉にできない。

母と娘の間柄以上に、父と娘の間には言葉で伝える上での距離があるのかもしれませんが。バージンロードで新郎にバトンタッチする時、自分の腕から娘の手が離れ、新郎のもとへと一歩踏み出した娘を目で追うお父さまの後ろ姿には毎回切なくなるものです。

お父さまの手を離れる瞬間、一言でもいいから「ありがとう」、そう言葉で伝えてあげて欲しい、そんな風に思ったりします。

けれども、言葉にしくなくても伝わる想いもある、そしてそれを言葉にした時に起きる奇跡があることを実感した結婚式がありました。

このカップルは、ハワイで挙式をされており、披露宴を改めて日本でされる予定でした。ですから、打合せの段階で私もハワイ挙式の様子をビデオで見せていただくことができました。

とても美しい新婦でしたが、最も印象に残ったのがお父さまの表情でした。

新婦ご自身、

「一番感動したのは父とバージンロードを歩いた時です」

そう繰り返しおっしゃっていて、仲がいい父娘であることが伝わってきました。

けれども、お父さまとは挙式の前日もゆっくりお話しすることができなかったとのことでした。

バージンロードを歩くお父さまは涙をこらえているようなお顔をされていました。

娘に伝えたい思いが溢れるほどあるのにもかかわらず、伝えることができないのではないかと感じられました。

そのお父さまの表情が頭に残り、挙式では伝えられなかった思いを披露宴の中で新婦へ伝える時間をおつくりできないか、と思いました。

「いやないよ。言葉で言わなくても伝わっているだろうから」

お父さま世代ですと、そんな風に恥ずかしがられる方がほとんどです。

もしかしたらお断りされるかもしれない、と思いながら、新郎から新婦のお父さまに「嫁ぐ娘へ伝えたい思い」を率直にお手紙に書いていただけないか、と頼んでくださるよう、お

願いをしました。

新郎もなかなかタイミングをつかめずに、1ヵ月ほどしてようやくお父さまにご連絡することができたそうです。

「お義父さんから彼女へ伝えたい思いをお手紙に書いてもらえませんか？」
すると、お父さまは、

「娘に伝えたい思いか……」

と少し考え、

「伝えたいことがありすぎて……うまくまとまるかな」

と、照れくさそうにおっしゃり、それでも前向きにお手紙を書いてくださることになったのでした。

そして披露宴当日。

お手紙を本当に書いてきてくださったかが気になり、お父さまのもとへご挨拶に伺いました。

「お父さま。お手紙……書いてきていただけましたか？」

そう、お訊ねすると、

「ああ、何とか……」

と、恥ずかしそうにおっしゃって、胸ポケットから取り出されたのはくしゃくしゃになったお手紙でした。

きつと何度も書き直し、何度も読み返したのでしょう。

そのくしゃくしゃになったお手紙を見て、私は思わず胸が熱くなりました。

綺麗な封筒に入れてある清書のお手紙もご用意されており、くしゃくしゃのものはご自身
が読み返して練習するためのものでした。

ですが、私はそのくしゃくしゃのお手紙にこそ新婦へのわきあがる愛情が込められている
ように思い、

「もしよろしければ清書の方ではなく、こちらを読まれてはいかがですか」
とご提案しました。

実際に読む時にはその書き直した跡はお客さまからは見えません。

けれども、お父さまの想いが詰まったそのお手紙で読むことに意味があるように感じたの

です。

披露宴は終盤を迎えました。

「ここで、新婦から感謝のお気持ちを込めてご両親へお手紙を……とご紹介したいところですが、その前に……」

お父さまにスポットライトが当たります。

通常であれば、花嫁からのお手紙の時間。

お父さまがいそいそとお手紙を取り出すと、会場は笑いに包まれました。

ですが、お父さまがお手紙を取り読み始めると、会場は水を打ったかのように静まりかえりました。

「君の命を授かったとわかった時、嬉しくて嬉しくて仕方ありませんでした」

「幼い頃はおてんばだった君、怪我をしないか毎日気が気ではありませんでした」

幼少時代の思い出話を語るお父さまの口調は優しく、新婦への愛がにじみ出ていました。

そして、お父さまは続けてこんなエピソードをお話になったのです。